

宇佐美 悠^{1,4}、山田 曜子²、高田 真理子³、横崎 宏⁴、今井 幸弘¹

神戸市立医療センター中央市民病院 臨床病理科¹、同産婦人科²、同消化器内科³、神戸大学医学部病理学講座⁴

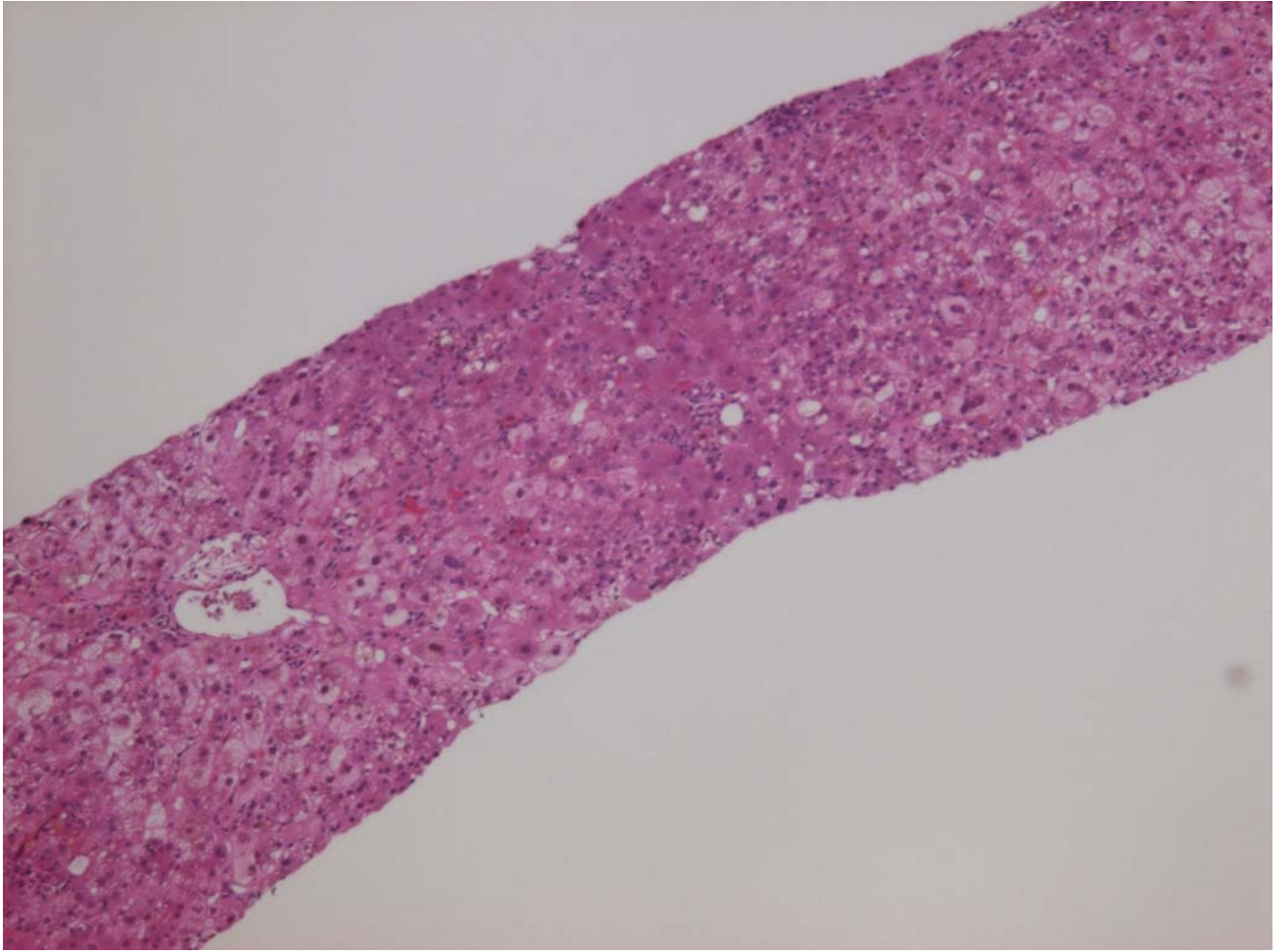
【症例】26歳女性の初産婦。

【現病歴】妊娠経過に異常を認めなかったが、平成18年12月中旬に感冒症状を認め、12月末より全身倦怠感、食欲不振、尿濃染を自覚した。平成19年1月5日に陣痛発来し前医を受診したところ、胎児仮死兆候が見られ緊急帝王切開を施行された。胎児は専門施設に搬送され、母体は術後出血多量、黄疸、凝固障害、肝障害を認め、急性肝不全の診断で同日当院搬送となった。

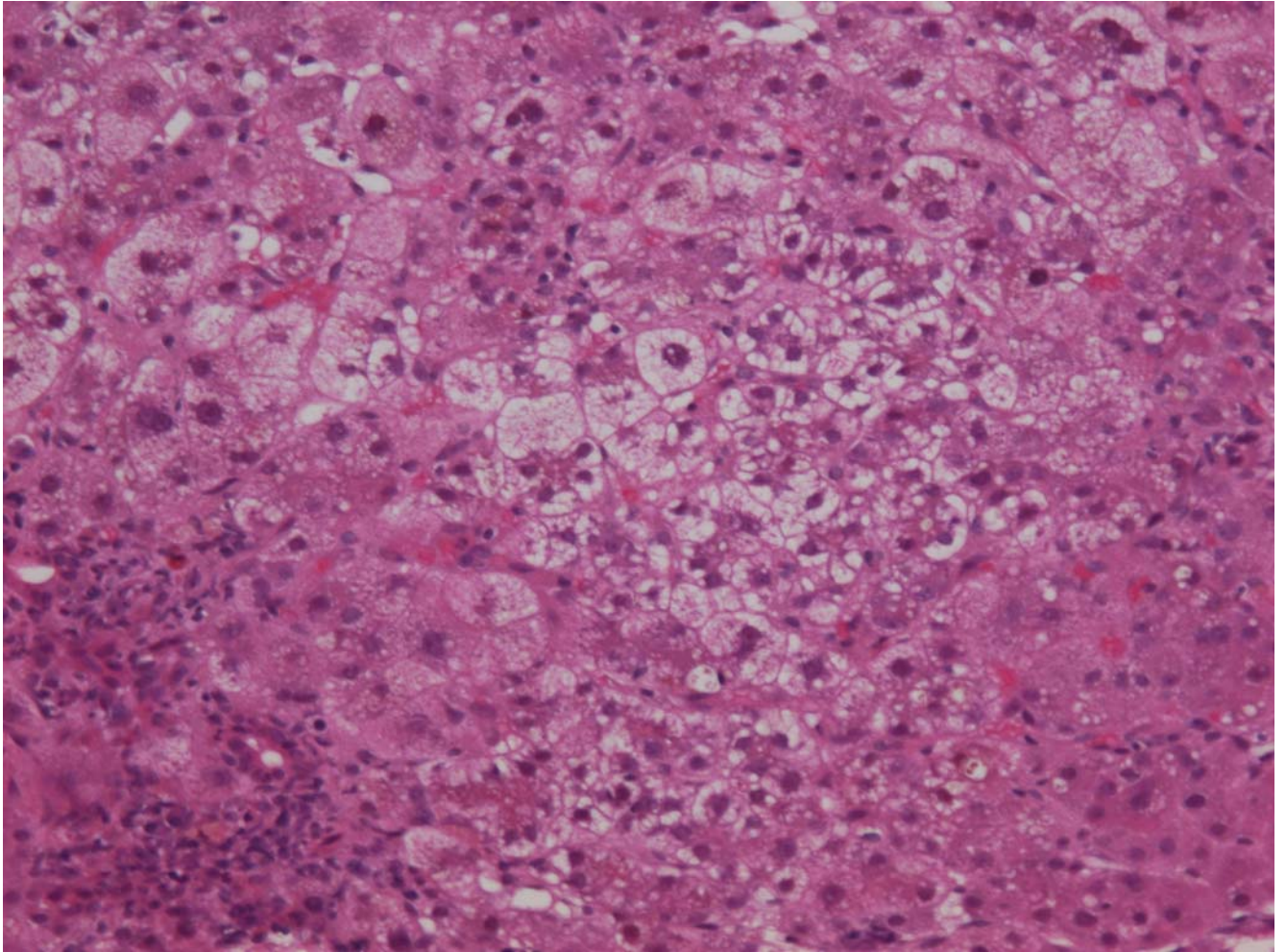
【既往歴】特記すべき事項なし

【経過】著明な黄疸、腹水、低血糖および凝固障害を認めた。腹部超音波検査で、肝は軽度実質不均一で動脈血流が描出不可能であったが明らかなサイズ変化や脂肪肝を認めず、CT検査上も肝には明らかな異常を認めなかった。各種肝炎ウイルスや自己抗体は陰性であった。臨床経過および検査結果から急性妊娠性脂肪肝を疑い、積極的保存的加療を行った。入院第3病日には帝王切開後の腹腔内出血による出血性ショックとなり緊急開腹止血術が施行されるも、入院後約1週間を境に状態は比較的速やかに改善し、入院第12病日に経皮的エコー下肝生検を施行した。

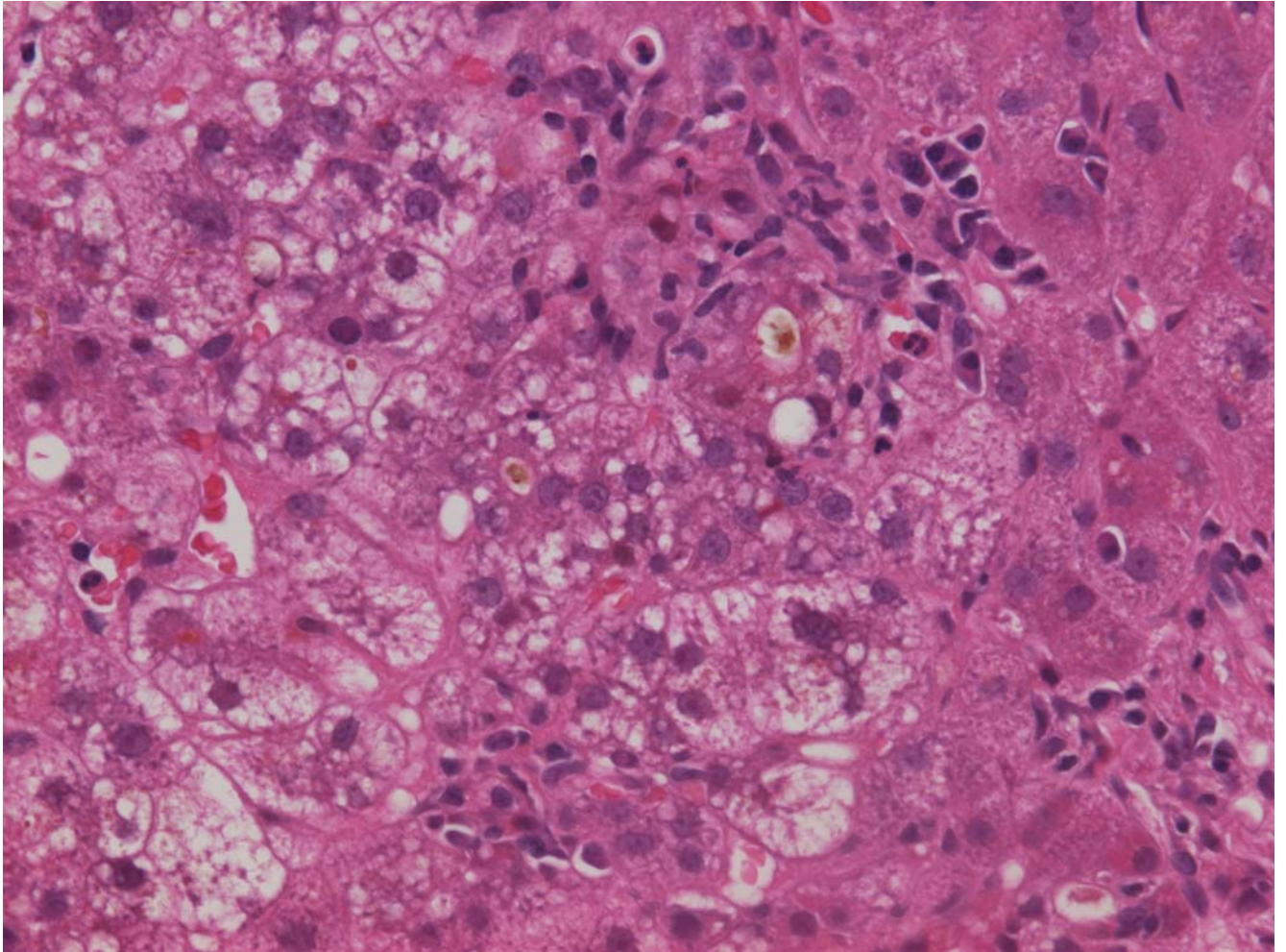
今回我々は、特徴的な所見を呈した急性妊娠性脂肪肝の一例を経験した。急性妊娠性脂肪肝は妊娠後期において急激な肝不全の進行とともに母児ともに生命の危険を伴う重篤な疾患である。過去においては予後不良であったが、1980年代以降、早期診断、早期児娩出により急速に予後改善が進んだ。本疾患の治療においては可及的速やかな児の娩出が予後を左右するとされ、本疾患を念頭において診療に当たることが重要である。経過、血清学的、エコーを含む画像診断により診断が確定することがほとんどであり、組織像を見る機会が多いものではない。本症例は急性妊娠性脂肪肝を学ぶ上で貴重な一例と思われたため、若干の文献的考察を加え報告する。



1



2



3